

共同研究の経緯

アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

—映像資料の文化資源化—

研究代表者 高城 玲

1. 共同研究の背景

本共同研究が対象とする映像資料「アチックフィルム・写真」とは、渋沢敬三を中心とするアチックミュージアム同人が、主に昭和初期、1930年代を中心とする調査旅行などの際に撮影した動画フィルムと写真を指す。神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）には、動画フィルムが23作品、写真が9,000点弱所蔵されている。それらは昭和初期にかけての日本各地の景観とそこに住まう人々の生活、民俗、芸能や当時使用されていた民具などのモノを具体的な映像として記録にとどめている。また、中には当時日本の統治下にあった台湾や朝鮮、満州などの映像も含まれており、非常に貴重な資料である。

今回2009（平成21）年度から国際常民文化研究機構（以下、機構）が、常民研を母体として新たに発足したことを受け、本共同研究班では、この映像資料を主な研究対象とする「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を推進してきた。共同研究に参加したメンバーは、本叢書〔論文編〕に論考を執筆している各氏で、民俗学、文化人類学、映像社会学、民具学、建築学、博物館学、日本村落史などの多彩な専門分野から構成されている。

2. 共同研究の課題と方針

本共同研究では当初から主に2つの課題を念頭に置いている。第1は、機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携し、映像資料の文化資源化の可能性を探るという課題であり、第2は研究目的として主に（1）モノという物質文化の問題、（2）モノと人との関係性の問題、（3）異文化（自文化）表象の問題等を検討するという課題である。

上記第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する研究に着手するにあたって、まずは前段階として映像資料の整理とその文化資源化のための作業が欠かせない。これまで、アチックフィルム・写真の価値が認められながらも、膨大な数にのぼる戦前の資料であることもあって、いまだ資料整理の途上にあり、特に動画フィルムに関してはいくつかの例外を除いて研究対象として正面から取りあげられることは多くなかった。

そのため本共同研究では、まずは映像資料の整理という作業に重点を置くこととした。この作業は、機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携を取りながら進め、特に写真に関しては、粗目録から仮目録、本目録へと段階を踏んだ目録化が進められてきた。こうした機構全体における

映像資料の整理状況の中で、本共同研究では地域を限定した上で、映像資料を核にした多岐にわたる情報を統合的に整理するという文化資源化の可能性を検討した。

ここで言う多岐にわたる情報とは、(1) 動画フィルムと写真の映像資料を出発点として、(2) 映像に関する目録、(3) 現在残されている収集品、(4) 当時の調査団が残した文献資料、(5) 上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報などを含み、それらを統合化して整理しようとしたのである。これらの情報は、より「厚い記述」のデータとして今後の研究を支える柱となることが期待されるものである。

特に、本共同研究の特徴ともなっている(5)に関しては簡単な説明が必要であろう。上映会で現地の住民から新たに提供してもらった情報とは、戦前に撮影された映像の上映会を現地で開催し、集まってくれた住民から新たに提供してもらう独自の関連情報である。

今回の共同研究では、こうした多岐にわたる情報の統合化を目指してきたが、時間的にも映像に記録されている全ての地域を網羅する余裕がない。そこで、膨大な資料に対して、時間的・人的な制約があることを考慮し、本共同研究では当初からいくつかの方針を定めて研究に取り組むこととした。その方針とは、第1にいくつかの撮影地を対象を限定して資料整理、研究を進めること、第2に1930年代に撮影された映像の当時を知る人が少なくなっている現状を考慮して、現地での上映会を開催し、現地の住民から映像資料に関する情報を収集すること、第3にできる限り共同研究班全体で共同の現地上映会と調査を行うこと、第4に上述したように機構全体における所蔵資料の情報共有化事業と連携を取りながら進めることの4点である。

まず映像資料の中でも注目したのは、1934(昭和9)年5月にアチック調査団が行った「薩南十島調査」(現在の鹿児島県十島村)の口之島と中之島地域の映像である。この地域の映像資料にまずは整理と調査を限定することで、今後に向けてのパイロットケースにすることとした。当時の「薩南十島調査」は、短期間に各島をめぐるという駆け足の調査ながら、民俗学・民族学、宗教学、地理学、農学、生物学、人類学、岩石学などの各専門家を含ま総勢20名以上の大規模で画期的な合同調査であった。数あるアチックフィルム・写真の中でまず「薩南十島調査」を選択したのは、上記のように重要な共同調査であること、また、資料が比較的まとまっており、特にフィルムが編集されて字幕解説もついていたことなどの理由による。

また本共同研究でもうひとつ注目したのは、1937(昭和12)年に撮影された台湾南部の山地に居住する「パイワン族」に関する映像資料である。この映像資料は、少人数での調査によって撮影されたものでありながら、現地に精通していた鹿野忠雄を案内役として非常に貴重な動画、静止画の映像記録となっている。動画フィルムも字幕が付されて編集されており、本共同研究では、撮影当時に日本統治下におかれていた地域の映像資料として、資料化に向けて重点的に整理・調査に着手する対象としたのである。

3. 共同研究班全体での調査と成果

上記の課題、方針と対象地域の絞り込みにもとづいて、本共同研究で行ってきた活動を、以下では研究班全体での調査とこれまでの成果に絞りながら紹介しておきたい。

1) 研究班全体での調査

(1) 鹿児島県十島村立口之島小中学校、十島村役場における現地上映会と調査

2010(平成22)年3月22-25日の調査で、特に3月23日には、口之島の島民約50名の参加

を得て現地上映会を行った。中には、当時の写真に幼少期の本人が写っているという事例も見られた。また、島内で最古の方には、重点的な聞き取り調査を行ったほか、鹿児島市内の十島村役場では、村長ほかの方々からも映像に関する情報を寄せてもらった。なお、上映会に際しては、事前に口之島に関する『神奈川大学日本常民文化研究所アチック写真 vol. 2』（写真1）の写真資料集を作成し、島民に配布してもらった上で調査にのぞんだほか、新たな上映会の様子もビデオカメラとICレコーダーで記録にとどめた。なお、以下の上映会でも同様の記録化を行った。

（2）台湾屏東県におけるパイワン族関連の現地上映会と調査

2010年12月26-29日に、映像が撮影された台湾屏東県泰武郷、瑪家郷、三地門郷でパイワン族の住民の方々に映像を見てもらい、聞き取り調査を行った。なおこの調査は、国際常民文化研究機構の「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」や「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」といった他の共同研究班と合同で実施することができた。

（3）鹿児島県十島村役場中之島出張所における現地上映会と調査

2011（平成23）年3月18-21日の調査で、特に3月19日には、中之島で島民約70名の参加を得て現地上映会と調査を行った。上映に際しては、事前に中之島に関する『アチック写真 vol. 4』（写真2）の写真資料集を作成し、島民に配布して調査にのぞんだ。

（4）台湾屏東県におけるパイワン族関連の現地上映会と調査

2011年12月16-20日の調査で、特に12月19日には、約40名の参加を得て、台湾屏東県泰武郷でパイワン族の住民の方々に対する現地上映会と調査を行った。聞き取り調査には言語的な不自由もあったが、当時の映像には記録されていない狩猟の際の歌を披露してくれる人や、映像にある繊維を縫り合わせる身体動作を再現してくれる人など、言語を越えた調査資料を得ることもできた。

（5）鹿児島県十島村口之島並びに中之島における調査

2012（平成24）年3月26-29日に、前2回の口之島と中之島での現地上映会を受けて、さらなる追加の聞き取り調査を行った。特に上映会で情報を寄せてくれた人々に重点的に聞き取りを行った。

（6）国立民族学博物館収蔵庫における薩南十島調査関連収集品の調査

2011年7月16-17日、並びに2012年10月13-14日に薩南十島調査時の映像資料に記録されているモノと、現在、国立民族学博物館に所蔵されている当時の収集品の対応関係を調査した。



写真1 口之島の現地上映会で配布した『アチック写真 vol. 2』



写真2 中之島の現地上映会で配布した『アチック写真 vol. 4』

2) 研究班全体での成果

個々の研究成果については『国際常民文化研究叢書 10 [論文編]』所収の論考や個別の成果報告に譲り、ここでは共同研究班全体で取り組んだ成果の概要を示す。

(1) 共同研究成果発表会 (2014年2月22日)

最終年度にあたり、「ビジュアル資料と渋沢敬三—アチックフィルム・写真からの展望」と題する公開の成果発表会を開催した。現地上映会開催地や外部からのコメントを含め、以下の様な構成で個別の研究報告を行った。なお、ここでの研究報告が本叢書所収各論考の基礎となっている。

- ①「方法としてのアチックフィルム・写真—ビジュアル資料と現地上映会—」(高城玲)
- ②「現地上映会開催地(鹿児島県十島村)からのコメント」(日高松行:鹿児島県十島村口之島小中学校前校長)
- ③「現地上映会開催地(台湾屏東県)からのコメント」(林志仁:中華民国行政院原住民族委員会)
- ④「アチックミュージアム後期における『十嶋鴻爪』『パイワン族の採訪記録』の問題と課題」(原田健一)
- ⑤「渋沢敬三の画像・映像資料認識」(井上潤)
- ⑥「アチックフィルムにみる民具」(小島摩文)
- ⑦「十島村の住居空間の現在—口之島を中心に—」(清水郁郎)
- ⑧「薩南十島調査とその後への影響」(羽毛田智幸)
- ⑨「アチックミュージアムの研究における渋沢敬三のポジション—イトマン・出漁・移動を事例に—」(小林光一郎)
- ⑩「コメント」(須藤功:民俗学写真家)

(2) 『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』2014年(写真3)

昨年度刊行したこの叢書8 [資料編]は上述した2つの課題の中の、特に第1の課題に対する成果であり、「薩南十島調査」に地域を限定しながら映像資料の整理とその文化資源化を行っている。中には、1. アチック写真本目録2013年度増補版(昭和9年薩南十島調査関連)、2. 国立民族学博物館の標本資料との照合、3. アチックフィルム『十嶋鴻爪』のDVDタイム表、4. 撮影場所を推定した口之島、中之島地図という主に4つの資料を収録している。

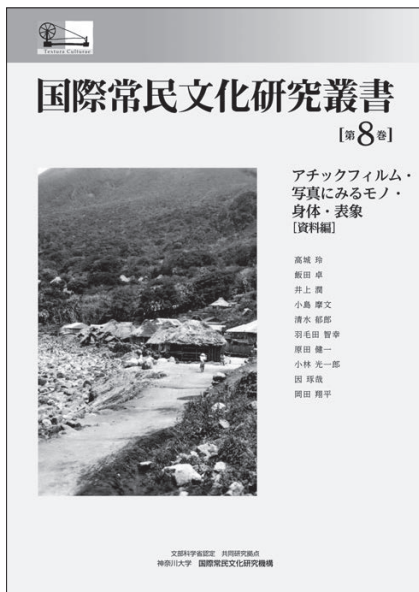


写真3 『国際常民文化研究叢書 8 —アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象— [資料編]』2014年

4. 本叢書 10 [論文編] の位置づけ

本叢書 10 [論文編] は、上述の2つの課題の双方に対する成果として位置づけられる。つまり、第1章「方法としてのアチックフィルム・写真」所収の2つの論考は、主として現地上映会に焦点を当てながら、特に第1の課題である文化資源化の可能性を探っていると考えられる。また、第2章「アチックミュージアムと映像資料」所収の4つの論考と第3章「アチックフィルム・写真とモノ研究」所収の

3つの論考では、第2の課題である「モノ・身体・表象」に関連する個別の論考を含みながら、アチックミュージアムや渋沢敬三の位置づけについても議論を膨らませていると考えられるだろう。

本叢書10〔論文編〕のひとつの特徴は、上映会を開催した鹿児島県十島村と台湾屏東県の現地から、日高松行氏と林志仁氏による直接のコメントをそれぞれ寄せて頂いていることである。これは、映像資料の現地へのフィードバックの試みと、さらに現地からのコメントという双方向的な調査を考える端緒ともなりえることであろう。

また、本叢書10〔論文編〕には、共同研究者以外からも論考を寄せていただいた。これまで主にアチック写真の整理に携わってきた小林光一郎氏の論考と、本共同研究の業務協力者として上映会開催や資料整理に従事してきた因琢哉、岡田翔平両氏による報告をそれぞれ掲載している。

昨年度刊行の叢書8〔資料編〕と本叢書10〔論文編〕は、2冊をセットとする本共同研究の成果刊行物となる。双方を互いに参照しながら利用頂ければ、より立体的な共同研究の概要が浮かび上がってくるものと期待している。